



博士ノ助手

白谷陽一郎

博士ノ助手

博士は天才であった。どのくらい天才なのかは七の段からしてあやしいわたくしはお伝えする術をもたないが、とにかく、まあ、それはそれは天才であった。博士は孤独でもあった。しかし、寂しくはなかった。私の置かれた状況は孤独ではなくソリチュードなんだと云った。博士は研究に没頭し、ほとんど口をきかなかった。モナ・リザのような容姿、倍音たっぷりボイスの助手その子ちゃんと時折ぼつりぼつり言葉をかわす程度であった。そんな研究室での研究、休息には古典を繙いたり、詩作を愉しんだり、晩酌には日本酒ちびちび、な生活に満足していた。

が、昔からそうだったわけではなく、ひとつの偉大な芸術作品との出会いがきっかけだったという。かく語られたその書物は、孤独な自分をも、それで良いのだと語りかけてくれているように感じたのだそうだ。孤独からソリチュードへの変化であった。

それからというもの、すごい楽しい研究生活を送った結果、すごい大発明をし、博士は爆発した髪にもまして歓びを爆発させた。その子ちゃんは「博士ステキ」を連発した。おまえのサポートのおかげだ、ありがとう、ありがとう、ありがとう、と落涙しつつその子ちゃんをあつく抱擁したのであった。

大発明後も、旺盛に様々な研究を続けた。が、さすがの博士も百五歳と三ヶ月半頃から研究室のベッドに寝たきりになった。身のまわりの世話はすべてその子ちゃんが行った。

「いよいよや、いよいよやで」と博士は寝言のようにいい続け、その子ちゃんは「アイシテル」と睦言のようにささやき続けた。それは、これまでもずっと博士を鼓舞してくれた言葉だった。

夜中に博士は次のような事も口走った。

光の中をさ迷うように

姉の地へと向かう

丸で鏡

磨き上げた林檎片手に

色したたるような蠟梅

紫式部

並ぶ光景は蜻蛉のようだ

芭蕉や

夏草や合歓の花

月見草横目に

油菜の花

遥かな日々の

堅香子の花

群生の水仙と光と時の中を今

遊星のように歩く

百五歳と六ヶ月と七日目の朝、最後の力を振り絞りその子ちゃんの美しい黒髪に、博士の人生の結晶、櫛の木の葉のようなものを挿した。

その日の深夜、こんな言葉を残して博士はひっそりと息を引き取った。

「おやすみなさい。」

その刹那、ベッド横の椅子にちょこんと腰かけていたその子ちゃんの、その子ちゃんとしての全プログラムが終了した。

ウィィィーーン...

世紀の大発明、その子博士はベッドに横たわる過去の自分の肉体をジッと見つめ、新雪のような美声で応えた。

「おやすみ。」